

会議の概要（議事録）

会議の名称	(番号) 1-49	墨田区基本構想審議会 第2部会（第5回）		
開催日時	令和6年11月25日（月） 19:00から20:40まで			
開催場所	墨田区役所13階 131会議室			
出席者数	【委員】鈴木みゆき（部会長）、角山剛、鎌形由美子、駒村康平、庄司道子、西村孝幸、平林秀敏、星野喜生、山口亮、山室学（計10名） 【事務局】楠政策担当課長、政策担当主査（矢野）			
会議の公開 （傍聴）	公開(傍聴できる) 非公開(傍聴できない)	部分公開(部分傍聴できる)	傍聴者数	4人
議題	1. 前回の振り返り 2. 第2部会のまとめ			
配付資料	1. 次第 2. 子育て・教育分野における未来予想図（修正案）【資料1】 3. 健康・保健衛生分野における未来予想図（案）【資料2】 4. 基本構想の構成、第2部会における未来予想図全体像【資料3】 5. 各分野における区民等の意見の反映【資料4】 6. 区民ワークショップ、オープンハウス型説明会まとめ【資料5】 7. 子どもの意見（タウンミーティング）【資料6】 8. 若手職員ワークショップからの提案【資料8】 9. 第5回部会への情報提供（山口委員提出資料）【資料9】			
会議概要	<p>1 事務局からの伝達事項 事務局より配布資料の確認及び審議会の公開に関する説明を行った。</p> <p>2 前回の振り返り 事務局より資料1について、説明を行った。</p> <p>（鈴木部会長） 今の件について、議論をしていきたいが、意見がある方は挙手にて発言をお願いする。</p> <p>（角山委員） 「こども」の判断基準について、令和4年に内閣官房副長官補付ということで、こども家庭庁設立準備室から、「こども」表記の推奨について（依頼）」ということで通知が出ている。ここでは、特別な場合を除き、平仮名表記の「こども」を</p>			

用いるということで基準が提示されている。

特別な場合というのはどういうことかという、法令に根拠がある語を用いる場合。例えば、公職選挙法における場合には「子供」は漢字になる。子ども・子育て支援法の場合にも「子供」の子は漢字になる。それから既存の予算事業名とか組織名などの固有名詞を用いる場合には、漢字の「子」でもいい。その他、子供期・現役期・高齢期と言ったいわば他の事の関連で表記される場合には特別な場合になる。それ以外は全て平仮名で「こども」というのが、行政文書でもこういう指針がこども家庭庁設立準備室から出ていたため、紹介させていただいた。

(鈴木部会長)

こういうことも踏まえて、墨田区の「こどもの定義」の方向性としてはよろしいのではないかと思う。

(西村委員)

私は、区の子ども・子育て会議の方にも出席しているが、そこで「こども条例」と「こども計画」というものを作ろうということで報告を受け、その審議をしている。「こども計画」は、「子ども・若者計画」と「子ども・子育て支援総合計画」という2本立てのものを1本にして、「こども計画」を作るというふうに区の方では考えている。角山委員がおっしゃった通り、「子ども・子育て支援総合計画」は子ども・子育ての法律に準拠している計画であるから、漢字の「子」を使っている。ただし、その他のものはやはり平仮名を使っているということで、基本構想の中でもそのように進められているという理解をした。

それから、今回修正した案を見ると、この部会での分野が「子育て・教育」になっているが、こどもに向けてのメッセージが多いので、「こども」という文字は入れなくて良いのか疑問に思った。子育ては大人の視点である。「こどもまんなか」という視点があるので、分野に「こども」という言葉があった方が自然であると感じる。分野を「こども・子育て・教育」とすることも検討していただきたい。

(鈴木部会長)

こどもはいつからこどもなのかを考えた場合、妊娠中からこどもであると考えられる。妊娠中に関することも文言として入っていないので、生まれる前からのことも視点としてあったら良いかと思う。

ほかにご意見がある方はいらっしゃるか。

(意見なし)

(鈴木部会長)

それでは、分野に「こども」を入れる、生まれる前からの視点も踏まえて修正をしていきたいと思う。修正案は次回の会議前までに、確認していただくようにするので、ご協力いただきたい。

次に「健康・保健衛生分野」の振り返りをしていく。事務局から資料の説明をお願いします。

事務局より資料2について、説明を行った。

(鈴木部会長)

それでは、健康・保健衛生分野についてのご意見をいただきたい。

(星野委員)

前回の議事録を読ませてもらったが、素晴らしい意見が多かった。

資料1-2に書いてあった「子育て・教育分野」の未来予想図の修正前は、どうしたらいいのかという疑問があったが、修正した未来予想図はきちんと形になっていると思った。素晴らしいものができるのではないかと感じた。

(鈴木部会長)

先ほど説明の中に、災害時の話が出ていたかと思うが、「連携を深め、環境を整える」のところで、「平常時も災害時も」という感じの表現にしていきたい。

(西村委員)

「連携を深め、環境を整える」というところが、「いざという時に」というのが前段に来ていて、次が「普段から」という表現になっているが「普段から」を先にして「いざという時」にもというふうにした方が良いと感じる。

(鎌形委員)

包括は墨田区の方がとても優秀で熱心に働いているが、介護が必要になった時だけではなく、もっと一般の区民の方が関われる、普段から敷居を低くするような仕組みがあると良いと感じる。敷居が高いようなので、民生委員が包括との間に入っ

てつないだりをするが、もっと気軽に皆さんが相談できると良いと感じる。

(山室委員)

これに関しては、区民と関係者の間に温度差があると感じる。その辺は民生委員の方々がつないでくれているかと思う。

(鎌形委員)

民生委員が包括とつなげてはいるが、昔と違ってどこの家もオープンではないので、しっかり鍵がかかっているし、マンションも増えていて、入っていくのがなかなか難しい。そこで、民生委員を通さなくても皆さんが包括に相談すればいいのねという状態になっているのが良い。見守り相談室は今でもかなり広く色々なことを行ってはいいるが、一般の人に浸透していない。見守り相談室を紹介したら、「見守りに来るのですか。」と言われたこともあったので、もっと多くの方に見守り相談室のことも認知してもらう必要があると感じた。

(鈴木部会長)

広報の問題だろうか。

(山口委員)

墨田区に限らず、どの地域でも同じ問題を抱えていると思う。ジャンルも健康、福祉に限らず、子育てでも、とにかく良い取組があっても市民にほぼ知られていないのが全国的にある。

一歩踏み込むと途端に色々な情報が入ってきて、色々なところでつながれるが、そこには壁があると感じる。そこをもう少し取組を行っている側から来てくれた方が良いと思っている。

例えば、前回話したコミュニティナースのように地域に飛び出していくことによって、みんなとのズレがちょっとだけ近づきたいなそういうことを繰り返していかないといけない。そういう橋渡しをする人、そこはある種、市民性を発揮する人がいた方が良い。まちなかには民生委員や自治会のような仕組みは墨田区ではすごく強いと思う。若い人は、そうしたところにアクセスしないので、地域の民生委員が誰かも分からないし、町会長も分からない人がたくさん増えてきている中で、別の形で何か接触をする場所をもっと作っていかないといけないと思う。

(鈴木部会長)

アウトリーチのシステムを作らないといけないということだと思う。包括を担当している部署がもう少し広くアピールをしていかないといけない。

(鎌形委員)

高齢者福祉課でやっているが、予算も大きいし、色々責任も重いので手広くするのは、現状で手一杯で中々難しいのではないかと思う。

(山口委員)

いきなり専門家に行くのはハードル高い部分あると思う。専門家とつないでくれるおせっかいな人が何人かいたら、もっと話やすく気軽にそこに行けると思う。

(鈴木部会長)

ここでも優しいおせっかいが出てきた。星野委員も老人クラブの活動を通して何かあるか。

(星野委員)

老人クラブが見守り等との関係でうまく接触する良い例が出てきている。ある家庭で、認知症になってしまったと疑われる人がいて、家族も人付き合いが悪い事例があった。認知症と疑われる人と話がかみ合ってこなくなったので、見守りの人に訪問してもらおうと思ったが、いきなり家に来ると、先ほどもあったように警戒されてしまう。そこで、老人クラブが最初にコンタクトを取って、つながった。自然な形で接触することができれば、支え合って地域に入れるのではないかと思う。

(鈴木部会長)

星野委員がハブになっていただいて紹介をしていただくとか、いわゆる友人なん

だよとか言っていたと安心してのかなと感じた。

(星野委員)

最近あの人に会わないという話になって、そこで一番仲の良い人が様子を見に行ったら、階段がとても急で、そこから落ちて怪我しているといったことがあった。すぐに見守りまで行ってもらって、すぐ病院に連れて行った事例もあった。こういう事例が身近に出てきている。

(鎌形委員)

老人会はすごく元気。いわゆる婦人会や青年会などは今までは元気だったが、その人たちはサラリーマンになっている人がほとんどで、女性ももちろん働いているのでどんどん会員も減っているし、なかなか動けない。元気な老人はいくらでも動ける。そういう人たちが見守りなどで地域の方とつながっていくのは良いこと。

(鈴木部会長)

そういう人たちはまちのこと何でも知っているの、シルバー応援隊として活動できると良いのかもしれない。すみだならではだと思う。

(山口委員)

北と南でだいぶ地域差がある。子育て支援の研修を受けている。子育てひろばはそれぞれ南北に1か所あるが、全然雰囲気違っていて北部の方は親同士がすごく盛んに交流をしている。しかし、南部の方は親同士の交流が全然ないらしい。それはおせっかいみたいなのが北部、向島などの周辺だと昔ながらの下町風情あるイメージがあるが、南部はどんどん新しい住民が入ってきている地域なので、交流がなかなか生まれづらい環境なのかなと思う。タッチポイントというかそういう接点をどのように持っていくのか考えないといけない。

(鎌形委員)

地域差はかなりあると思うが、南部の方は SNS がやはり有効である。折り紙プロジェクトから派生したイベントをやったが、そのイベントに来た人は学校からのチラシではなく、SNS で知って来ていたようである。子どもたちが楽しそうな顔すると親御さんも楽しい感じになっているのを見ていて、こっちも嬉しくなった。

地域によって違うかもしれないと思うが、このようなツールが北部の方でも浸透していけば良いのでは。

(鈴木部会長)

SNS は世代が大きく関わっている感じはする。

(山口委員)

SNS は世代で使っているツールが変わる。世代でどうしても別れてしまう。インスタが良いとか、世代によっては facebook が良いとか層が全然違ってくる。あらゆるもので発信していくことが、今は結構大変になっている。

(平林委員)

先ほど包括の話があったが、包括は結構知られている方である。ただ、色んなところで相談機関があるが、なかなか知られてない。例えば、社会福祉協議会とか知られていない。社会福祉協議会は色んな世代とか、ボランティアセンターもあるし、何かあったらボランティア団体につないでくれたりとかするけど、なかなか知られていなかったりする。包括以外の健康とかそういうところの窓口のようなものが知られる取組があると良いと感じた。

あと3つの視点で福祉分野と被るところもあり、自分の中でもモヤモヤしている。どちらかという自助の視点がかかなり色濃いなという印象があって、健康づくりは自分でやるのもそうであるが、何か生きがいを見つけたり、友達同士で何か活動したり、お互いにやる互助の視点も健康づくりに繋がってくる。駒村委員が以前に認知症の話をした時も、何かやっている方が認知の進みが緩やかになるといった話もあったので、そういう視点、気軽に参加できる場というのが、まさに互助の視点なのかなと思う。福祉分野で、「支え合い」という視点があり、被るところもあるので、そこがモヤモヤしているところ。世代交流も健康づくりに繋がるし、その辺をどう表現するか難しいと思った。

(事務局)

健康づくりというところでは、すみだ健康づくり総合計画というものを区で作っている。健康づくりは今まではどうしても自助、自分で頑張ろうというのが基本ではあったが、計画の中で掲げているすごく大事な視点として「ゼロ次予防」という言葉がある。

「ゼロ次予防」は自分で頑張っていくということだけでなく、一人ひとりの取組を後押しすることをとても大事にしていくこととしている。そうした思いを「最初の一步を後押しする」といった、この一言で良いのかと意見はあると思うが、後押しという言葉にあるように、その人自身が動くだけではなくて、行政も含めて、周りの人たちが本人の行動を後押しするようなまちにしていくという思いを込めて、書かせていただいている。しかし、そういったところをこの表現では伝わらないという趣旨で、委員からの発言があったかと思うので、ブラッシュアップを考えさせていただきたい。

(鈴木部会長)

それでは次第に沿って次の議論に移らせていただく。本日のメインである部会のまとめを行っていく。これまでまとめてきた未来予想図を振り返りながら、改めて10年後のまちとしての方向性、それからご意見の不足などの確認をしていただくことになる。議論を始めるにあたって事務局から資料の説明をお願いする。

事務局より資料3から資料8までについて、説明を行った。

(鈴木部会長)

では、事務局から説明があったとおりこれまで議論してきた3つの分野につい

て、改めて全体を見て、10年後の未来予想図に関する文言を記載の内容で適切が足りない視点や追加意見などあるかということでご意見をいただきたいと思う。順番に、福祉、こども・子育て・教育、健康・保健衛生の順番で見ていき、その後基本目標について議論していきたい。

では福祉について意見がある方は。

(角山委員)

先ほどおせっかいについて事務局から説明をいただけると聞いたので、このタイミングで説明していただきたい。

(事務局)

「おせっかい」という言葉が果たして世界的に通用する言葉であるかどうか、もしかしたら「おせっかい」というのがそのままおもてなしのように通用する言葉なのではないかというような話があったので、可能な限り調べさせていただいた。

調べてみたところ以前にもお伝えしたが、「おせっかい」で単純に検索をしても、大体が余計なお世話という意味で出てきてしまう。英語に翻訳をしようとしても余計なお世話というイメージで翻訳が出てきてしまうので、これでやはり我々の目指している「やさしいおせっかい」というような言葉とは意味合いが違うと思っている。「やさしいおせっかい」はどういう意味合いだろうかと考えていた際に、部会長とかにも色々な情報提供もいただく中で、近隣の方々との関係性、近隣の方々に良い影響を与えていくというのがすみだの「おせっかい」であると考えた。

近隣の方々に良いことをするというのを英語にしたらどうなるのかと思っていたところ、だんだんと壮大な方向に話がいってしまい、結論からいうと「隣人愛」、「隣人を愛せ」という言葉がもしかするとすみだの下町の「おせっかい」と近いのかもしれないと思ったところである。英語にすると「neighborly love」、近隣の人への愛、そういう人たちを愛して手を差し伸べるというような意味合いになるが、あまりにも宗教に寄りすぎた言葉を行政が使うのもいかなものかなというところがあるので、やはり元に戻ってみると駒村委員のおっしゃられた通り、すみだのまちの中で起きている近くの人たちの助け合いという意味が「おせっかい」とであると思った。

ただ一方で、海外の人に「おせっかい」とは何か聞かれると、もしかすると一番わかりやすい説明は隣人愛なのかもしれないなと思ったところである。

(鈴木部会長)

ものすごく調べていただきありがとうございます。「neighborhood effect」だと否定的になってしまうので、「おせっかい」を英語で表現するのは難しいと思う。

しかし、「おせっかい」という言葉は福祉分野に限らず全ての分野に出てきた気がする。

(角山委員)

肯定的で調べると「helpful」、「thoughtful」、「caring」辺りが当てはまるのではないか。

(山口委員)

資料9について、説明させていただく。今まで自分が重要だなと思っているところで三つ提案する。

1つは小さな居場所をたくさん増やすということ。特に墨田区は居場所がだいぶ弱いのではないかという意識があって、例えば若者支援とかでも相談窓口はあるが、居場所という機能はない。今、全国的にユースセンターのようなものにシフトしていて、支え合いながら自分を高めていくエンパワーメントしていくといったところが主流になってきていると思うが、そういうところが墨田区はすごく弱いなと思っている。

世田谷区のお出かけひろばを少し紹介したが、例えば歩いて15分のところに居場所があるといった具体的な提案をしていく方が良いのではないかと思っている。これは全部行政がやるという話ではなく、行政がそういう方針にしていけば、恐らく住民でやりたいという人は結構いると思う。自分の周りでも居場所づくりをしたいという話は最近すごく多くて、うちにも見学に来る人もいたりする。そういうところで、そういう意識が高まっているなと思っている、そこをもっとうまく行政が作り上げていくと良いのではないかと思っている。

小さい場所をたくさん作る中で、最終的にはまち全体が居場所になることが理想であると思っている。自分が今、墨田区で100人カイギやまち活カイギのようなワークショップをやっていたりして、そこで交流が生まれ、そこで生まれた交流が外にも波及していく。その人たちで、自分の知らないところと一緒にお酒を飲みに行ったり、一緒にイベントをやっていたり、どんどん交流の輪が広がっている。こういう交流の輪を広げていくことが良いのではないかと思う。

2つ目は、教育と福祉を融合していく。さらに言うと地域と連携していく。教育と福祉はやはり単独で存在するものではないと思う。特に、教育現場に福祉の視点を持った人が少ないとすごく感じている。例えば、発達障害について話せる人が一緒に交流することだけでも、理解にすぐ繋がると思う。ケース相談会か何か分からないが、そういうことをやった方が良いかと思う。

3つ目は、年代や属性で区切る、要するにユースワーク、高齢者、こどもとかではなくて、1人の人間を支える、個人として認識して見守る体制が必要であると思う。これは、地域医療は当然そうだと思うが、福祉的なところなど、個人情報の壁もあって難しい部分もあると思うが、情報交換、情報共有をしていくことで、そういうことができるのではないかと思う。

あと最後に、参考に「おせっかい」はやはり日本で肯定的に使っているところも結構多いのかなと思っている、コミュニティナースも「おせっかい」をキーワードにしている。来月14日に、「GOOD おせっかいアワード2024」というのが開催される。ここにはおせっかいストーリーというのがたくさん載っていて、参考になるのではないかということで載せてある。以上。

(鈴木部会長)

小さな美術館とか博物館が、ものすごくたくさんある区である。それと同じぐらい気軽に行ける場所があったら良いと思っはいるが、場だけではやはり駄目で、

駒村委員がおっしゃったように出番もあると良いと感じている。

(事務局)

今おっしゃっていただいたことは、事務局としてもすごく大事なことでおもうている。今回作っていく基本構想というビジョンの部分と、その下にある具体的なものが書き込まれた計画というものをしっかりと分けていく必要もあると考えている。例えば、1つ目の小さな居場所をたくさん増やすというところを、我々がビジョンの中の落とし込みとして、資料の4-1の福祉分野の一番上のところで「つながりの中で、誰もが自分らしくいられる居場所を地域の中で見つけ、」というような表現していることや、その下の「支え合い、助け合う」の中では「ひとりぼっちにしない地域をつくる」というような表現もさせていただいている。逆に言うと、この言葉では表現できていないという話になるかどうかポイントになってくるのではないかと考えている。

また、2点目の教育と福祉、地域との連携というところでは、こども・子育て・教育分野において、「ともに育つ」というような表現の中で、「家庭と地域、教育、そういったところがつながりながら、こどもの成長をしっかりと支えていく、保護者や地域もこどもと一緒に成長していく」、そういった表現の中でご意見を反映している。

また、3点目の年代や属性で区切らずというところでは、福祉分野で言うと、「自分らしさを大切にする」というところで、高齢者のイメージもあるかもしれないが、これは「自分自身のことを理解して、できないことを周囲に頼りながら、住み慣れた地域の中で自分らしく暮らし続けられる」ということであったり、健康・保健衛生の分野では、「ずっと健康でいられるまち」という文章の中に、「一人ひとりの年齢や特性に合った適切な支援を受けられる環境が整っている」、こういった表現で、1人の人間のことを一人ひとりきちんと個別に見ながら適切に支えられる適切に支援ができるまちを作っていくという思いを込めている。

これまで出てきた意見を今の説明のようにまとめているということ踏まえながら、ご意見をいただきたい。

(鈴木部会長)

今の事務局の説明で恐らく大事なのがキャッチフレーズで、まず総論として、「〇〇なまち」というところから考えていきたい。

(鎌形委員)

「ほっとできるまち」はどうか。

(鈴木部会長)

イメージとしては居心地が良いということかと思う。

(星野委員)

人間味のある言葉が欲しい。それと居場所だけだとあまりにも抽象的過ぎるので、何か修飾する言葉があっても良いと感じる。

(平林委員)

「おせっかい」の話で隣人愛が出てきたが、確か民生委員・児童委員の憲章の中にもあったような気がする。民生委員・児童委員もやはり「おせっかい」を大切にしていると感じた。あとは、例えば「ぬくもり」、「ぬくもりを感じられるまち」はどうか。

(鎌形委員)

先ほど社会福祉協議会の話が出てきたが、社会福祉協議会が言ったことではなかなかまちの人が動かないが、興望館が言うと人が集まって動くというのがある。その辺の差の違いが分からないが、同じようなことをしていても、まちの人の心に響くから興望館の言うことは聞いて、協力する。

(平林委員)

話が変わってしまうかもしれないが、自分が家族に言っても聞かないのに他人の言うことは聞くということもあったりする。

(西村委員)

「〇〇なまち」の下に福祉分野、子育て・教育、健康・保健衛生分野がある。その分野のそれぞれで「やさしいおせっかいで地域の幸せを育むまち」となっていて、「育む」まちである。子育て・教育分野では「こどもの可能性をひろげるまち」、健康・保健衛生分野では「ずっと健康でいられるまち」と健康でいられるのは自身のことである。でもこどもの可能性を広げるのは、こどもではなく大人。そこはこどもを主体にするなら「こどもの可能性がひろがるまち」にした方がいいのではないか。幸せは育まれるのかなどそのあたりをどこの視点でものを見るかによって、大きく最終的なワードも変わってくるのではないかと感じる。

(山口委員)

全体通して言えるのは、1人でやるのではなくみんなでやってくみきたいな、そういうイメージ。

(角山委員)

頭に思い浮かんだことをぱっというと、「誰もが出番のあるまち」

(山口委員)

それこそ「自分らしく生きられる」というのがあっても良い気がする。

(事務局)

この第2部会で難しいと感じるのが、こどもから高齢者、障害の有無も含めてとなってくるので、他の部会以上に、すべての人にとってずっと落ちてくる言葉となってくると、表現するのはなかなか難しいと感じる。しかし、今言っていたことはすごく大切なことが多く、こどもにとっても自分らしくであったり、こども

にも出番があるまちであったりするのは良い言葉であると感じる。

(星野委員)

下町風の方が良い。

(鈴木部会長)

ぬくもりであったり、おせっかいだったり、出番、そういう人の体温が感じられる表現があると良い。

(山室委員)

「ぬくもりがある」というのは良い。「ぬくもりのあるおせっかい」はどうか。

(山口委員)

世の中には色々な人がいる。そこで一つのワードでイメージを固めてしまうと、それを受け入れられない人、否定されたように感じる人は一定程度いると思う。みんなが拒絶されてないような言葉が良いと感じる。

(鈴木部会長)

一つに絞るのは難しい。

(事務局)

「ぬくもり」というような話があった時に、鎌形委員からお話のあった「ほっとできる」という言葉は温もりを感じられる表現であり、「ほっとできるまち」が良いよねと言われたときに否定する、自分が否定されたように感じる人はいないのではないかと思う。ただ、「ほっとできるまち」という言葉になった時に大人はすごくしっくりくるが、こどもにとっての「ほっとできるまち」というのが想像できた上での言葉になっているのか考える必要がある。

(鈴木部会長)

こどもにとっても居場所はまさにほっとできるところ。

(山口委員)

「自分らしく」、「誰もが自分の素のままでいられる」のような自分が否定されていない表現ができると良い。

(鈴木部会長)

こういう言葉を繋げて文章を考えていくということか。

(事務局)

今は、キャッチフレーズ「〇〇なまち」ということを議論いただいている。それを踏まえて、「〇〇なまち」はどんなまちなのかということの説明するために将来の姿として文章にしていこう。

例えば、先ほどからおっしゃっていただいている言葉の中で「自分らしくいられる」という言葉がキャッチフレーズに出ている方が分かりやすいのか、キャッチフレーズは例えば「ほっとできる」とか「ぬくもりのある」、「出番がある」という形にしておいて、将来の姿として説明していく中で「自分らしく」という言葉を使った方が伝わりやすいか、そういうこともイメージしてご議論いただきたい。

いただいた意見をこれはあり、なしみたいな形にすることは考えていない。できる限り色々な意見を踏まえながらまとめていきたいと思っているので、ぜひ思ったことを言っていただきたい。

(西村委員)

「誰もが自分らしく生きられるまち」というお話は、自分が多様性の社会の中で能動的に動くことができるということ、「ほっとできる」というのは逆に言うと感じられる、自分が気持ちよく受動的な部分とこの2つというのがどちらもあった方が良いと感じた。受ける気持ちとその自分が働きかける側の話とが両方あると。

(鈴木部会長)

それはまさに、将来の姿の文章の中で考えていければ。この部会は年齢層もそうだが、扱う範囲が広い。

(庄司委員)

全部を網羅するのは本当に難しい。

「個性を認める」、「個性を認めて受け入れる」というのはどうか。

(鈴木部会長)

一人ひとりが大事であるということですね。

(山口委員)

言葉を考えるうえで、どこに主体を置くのがいいのか。

(事務局)

今回の基本構想は、やはり行政だけではなく、最初に申し上げている通り区民の方々も含めて、一緒になって基本構想に掲げるまちを目指していこう、としている。そういう意味では先ほどの興望館の話ではないが、心に響いてほしい言葉が良いと思っている。それを考えた時に、受動的になるよりも恐らく自分が主体だと思った時の言葉がある方が良いと思っている。先ほどのような「こどもの可能性がひろがるまち」など、主体がその人にあるというような表現になっていく方が心に響きやすいのではないかと感じている。

あと、今色々ご意見をいただいている中で、頼っても良いということを表現するような意味合いがあると良いと思った。

(山室委員)

「ぬくもり」という言葉は、人と人とが接触しないと感じられない。人と関わら

ないと感じられないので、「ぬくもり」という言葉は良いと思う。

(平林委員)

頼っても良いというのは、やはり「つながり」といったワードにもなるのではないか。

(鈴木部会長)

先ほどの見守りの話ではないが、安心してつながれるということが大事。

(駒村委員)

「おせっかい」、世話好きということで、次に出てくるのが「人情」という言葉で、「人情」を調べたら英語にはできないらしい。「人情で紡ぐまち」とか、お互いに人情を使って、地域を考えていくという感じは、「ぬくもり」と同じ流れだと思う。下町人情はあまりにもコテコテだが。「人情で織りなす」なども。

(事務局)

今の表現は、イメージとして事務局でも持っており、もしかするとその「人情で織りなす」となってくると、第2部会を飛び越えて、基本構想全体の概念と言っても良いものになるのかもしれない。墨田区というまち全体を表現するようなことになるかもしれない。あと、「織りなす」という言葉は、まさに OLINAS 錦糸町を連想するが、滝廉太郎の花の中にも、「錦おりなす長堤に」という言葉があるので、「織りなす」というのは墨田区とも関連性の深い言葉であるというのは間違いないと思う。

第3部会の未来予想図の一つでも「織りなす」を使っていた。第3部会では「人と人とのつながりが織りなす地域力日本一のまち」としている。

(鎌形委員)

保健分野が入っているので、コロナの時に、墨田区にいるとすごく安心感があつたので、今まで言ったようなことに加え、誇れるような言葉、墨田区にいれば安心といった意味合いが入ると良いと感じる。保健センターもすごく素晴らしいのができたので、区民が意識していけると良い。

(鈴木部会長)

安心という点では、ぜひ防災の視点を入れてほしい。

(事務局)

第3部会の方で防災というところの中では、こどもの時からの教育、山口委員もおっしゃられていたと思うが、教育と防災の分野の連携というのがすごく大事だという意見も出ている。ぜひ検討させていただきたい。

(鎌形委員)

教育分野のところ、教育は様々なことに関わる。包括が認知症の教育を小学校

に回ってやっているのです、そんなようなことも全体的かここで含められると良い。教育と連携して、こどものうちに防災もそうだし、こどもがお年寄りを見守るといったことも「やさしいまち」、「おせっかい」の中に入るかなと思う。

(鈴木部会長)

それこそ生まれる前から。母子保健からずっと一貫してつないでいくこと。

(西村委員)

福祉、子育て・教育、健康になっているが、話があったように分かれているものではないと思っている。各分野も部会も分かれているものではないので、それを構想にした時、図示した時にその全部が重なってくる、一番重なったところが構想のキーワードになると感じている。独立しているのではなく、一体的にすごくそれには関連するものが多いと思う。

(山口委員)

主体性を刺激することが良いと思う。今は行政がサービス化してしまっているの、みんな誰かがやってくれるという発想になっていると思う。そうではなく、地域の人たちの力でやっていこうといった意識になるワードが良いと思う。

(事務局)

「おせっかい」が一つ共通しているワードである。それから主体的な言葉であった方が良いと言った意見、あと「ぬくもり」、「人の温かみ」というところを組み合わせると、「おせっかいでぬくもりをつくるまち」というような表現も一つの案としてあるのではないか。そうした時に自分たちが積極的におせっかいをしていく、迷惑になるのではなく、ぬくもりを作るためにおせっかいをしていくという表現もできるのではないか。ただ、「おせっかいでぬくもりをつくるまち」と表現すると、恐らくこども・子育て・教育が少し離れてしまう気はする。

(鈴木部会長)

一度、これまで出てきた意見を事務局で整理してもらえるか。

(事務局)

人間味のある言葉、1人ではなくみんなで行っていくということ、頼っても良いという意味合いを込める。さらに下町らしい言葉が望ましい、拒絶されていない、拒絶してしまうような人が居てはいけない、自分が否定されていると印象を与えない。こどもにも通じる表現であり、能動的、受動的の両面で考える。ぬくもりというものが人と人をつないでいくということ、安心してつながれる、織りなす人情、さらに安心という中には墨田区を誇れるような思いを込めていきたい。防災の視点、包括と教育、地域の力というようなご意見があった。こどもと高齢者が関わられるような、お互いにうまく相手に対して良い影響を与えられる、教育を通じてこどもがアプローチしてくれるようなそんなまちを作っていくことが大事なのではないかというような話であったかと思っている。

改めて見ていった時に、「おせっかい」は誰がするものなのか、皆さんはどのように思っているのか。「おせっかい」をする側、受ける側がいると思うが、それが例えばこどもの視点に立った時に、おせっかいをするのは大人であって、受けるのがこどもという見方で良いのか、先ほどの話であれば防災教育などを行うことによって、こどもが大人を助けられるまちをつくっていくという話になるのであれば、もしかすると逆の視点での話なのかもしれないと感じた。

「おせっかい」は誰が誰にするものなのか、地域が個人に対してするのが「おせっかい」なのか、もしくは個人が地域に対して、何かできることが「おせっかい」という表現になってくるのかとか、そんなものはないんだろうかっていうのはちょっと思った。

(鈴木部会長)

前回、駒村委員がおせっかい寿命の話をしていたが、「おせっかい」をする方もされる方も寿命が延びる。

(駒村委員)

ここに来る前のシンポジウムで、幸福な人はどういう特徴があるのかといった話で、健康とか寿命とか、視野が広いとかの中で、利他的な人ほど幸福度が高いという話があった。利他的というのは他人に何かしただけではなく、自分自身が幸福になる。「おせっかい」と言い換える話だと思っている。「おせっかい」は決して受身でもないし、主体的な意味もある。

(山口委員)

NPOとかでも助けられた当事者が、助ける側に回ることもある。そういう循環、常にそういう入れ替わりが起きていくことが良いと感じる。

(駒村委員)

「おせっかいが循環するまち」

(庄司委員)

循環は循環バスを連想させる。

(事務局)

循環を置き換えるとなると、「おせっかいがめぐるまち」はいかがか。

(駒村委員)

「おせっかい」はこどもも高齢者も全て含まれる。

(鈴木部会長)

世話好きなこどももいる。

(西村委員)

決して乳幼児が受ける側だけではなく、5歳の子が2歳の子のお手伝いをしている場面だって保育園にはたくさんある。そういう意味ではそれこそ保育の分野でも、こども主体と言われていたのが、大人も含めてみんなが主役である。

(角山委員)

ただ、「おせっかい」というのはそういう意味では難しい。言葉として色々な要素が入っている。だからこれを本当に一つの基本的なワードにするとすると、やはり墨田区での「おせっかい」は何だろうということをきっちりと説明できるような何かが必要である。でないと、おせっかいのあるまちなんて余計なお世話だということだってあるかもしれない。

(事務局)

注釈をつけないと分からない言葉にはしたくないとは思いつつ、「おせっかい」というのが伝わってほしいという思いもあるので、非常に難しい。

(角山委員)

墨田区の言ってる「おせっかい」すごくユニークであるという説明が届くと、すごく良い言葉になると思う。

(山口委員)

でもそのぐらいでないと、大体どこも同じようなフレーズになってしまう。そのぐらい違ってても良い気がする。

(事務局)

だいぶゴールが見えてきたが、キャッチフレーズはこの場で決めていただき、将来の姿として文章にしていくのは、事務局が作成することもできるがどのようにしていけばよろしいか。

(鈴木部会長)

「おせっかいがめぐるまち」、本当に墨田区らしい。

(駒村委員)

自分が言いたいこと言ってやりたいことやるのではなく、相手が望んでいることをきちんと予測して相手のためにそのタイミングも含めて、やってあげることが大事。

(鈴木部会長)

第2部会として、「おせっかいがめぐるまち」でいかがでしょうか。

(異論なし)

	<p>(鈴木部会長)</p> <p>ありがとうございます。それでは、将来の姿の文章の方は事務局で案を作成し、皆様には次回までにご確認をいただくということをお願いする。</p> <p>最後に次回のご案内をお願いする。</p> <p>(事務局)</p> <p>今回は部会ではなく、全体会となる。開催予定日、会場については12月16日(月曜日)午後7時からすみだ共生社会推進センターで行う。</p> <p>先ほど決定したキャッチフレーズを基に、将来の姿の文章は事務局で作成し次回の会議の前までには皆様に提示して、ご意見をいただけるような形で段取りを進めていきたいと思っている。</p> <p>事務局からは以上。</p> <p>(鈴木部会長)</p> <p>皆様のご協力のおかげで本当に円滑な運営ができた。</p> <p>以上で第4回の部会を終了する。</p> <p>解散</p>
所 管 課	企画経営室政策担当 (内線 3 7 2 2)